

# 信濃教育

## 巻頭言

### 教育とは…

教育とは何かと考えるとき、私には忘れることができない場面がある。

大学を出てすぐに小学校一年生の担任となった若き女性である。子どもたちと共にアヒルを飼う生活が始まった。子どもたちはアヒルに赤ちゃんを産んでほしいと願い、オスも飼うこととなった。そしてメスは産卵し、タマゴが少し割れはじめ、いよいよ赤ちゃん誕生の瞬間が迫った。

子どもたちは、「先生、手伝っちゃあだめだよ」と言って帰って行った。雛が自分の力で殻を割って出てくるのを願い、まして外からの力で殻を割ると、雛を傷つけることがあると学んだ子どもたちなのである。

しかし…。もうずいぶん時間が経つのに殻はいっこうに破られない。心なしか雛の鳴き声が弱くなっているように感じる。周りのベテランの先生は、殻を割らないと雛が死んでしまうとアドバイスしてくれる。だが、その先生は迷うのである。子どもたちとの約束があるからだ。「先生、手伝っちゃあだめだよ」と言って帰って行った子どもたち。しかし、このままでは雛の命は…。

子どもとの約束を守って、手伝わないのが正しいのか、目の前にある小さな命を救うために殻を割るのが正しいのか、誰も知らない。どちらが教育的なのかもわからない。外から理屈はいくらでもつけられる。子どもの願いや思いを大事に、と言うのは易い。命の重さを論じるのもいいだろう。しかし、この時、この場面での判断は、子どもたちと共に暮らし、子どもたちと共に笑い、悩んできたこの先生しかできないのだ。

結局、その先生の生き方、考え方そのものが教育なのだろう。